

自己語りの社会学

ライフストーリー・問題経験・当事者研究

牧野智和

西倉実季

鷹田佳典

桜井 厚

伊藤秀樹

中村英代

森 一平

湯川やよい

野口裕二

小林多寿子
浅野智彦

[編]

[著]

人生と経験へのまなざし

かけがえのない一人ひとりのライフ(生活と人生)、自己表現、人生の転機、当事者の生きづらさの語りとは。対話的構築主義・自己物語論・ナラティブアプローチ・サファリング研究・エスノメソドロジーなど社会学による最新の質的研究を凝縮した一冊。

新曜社

自己語りの社会学

ライフストーリー・問題経験・当事者研究

牧野智和

西倉実季

鷹田佳典

桜井 厚

伊藤秀樹

中村英代

森 一平

湯川やよい

野口裕二

[著]

小林多寿子

浅野智彦

[編]

目次

編者まえがき（浅野 智彦） 1

第1部 自己表現の語り 7

第1章 「いま」を確かに残す——ライフログとアイデンティティの視覚化……………牧野 智和 8

1 手帳に魅せられた人々

2 「書かれた私」の社会学——日記研究と自分史研究を中心に

3 「自己の書法」の現在形としてのライフログ

4 物質的な異種混交性への配慮

第2章 なぜ演じるのか——フィクションに託すサファリングの語り……………西倉 実季 30

1 「この、顔のせいで」

2 演じることと人生

3 一人芝居『悪魔』——登場人物に代弁してもらう

4 一人芝居『華』——複数の自己を対話させる

5 サファリングの創造性

6 フイクションを介した自己表現

第3章 もうひとつのドクターズ・ストーリー……………鷹田 佳典 57

——患者の死をめぐる小児科医の苦悩の語り

1 「自分は天国に行ったらいけない」

2 医師の語りと苦悩

3 A 医師のストーリー

4 治療をめぐる医師の苦悩

5 医師の「苦悩の語り」をどう聴くか

研究コラム サファリング研究（鷹田 佳典） 80

第4章 人生の転機について語る人々——自由記述を量的にとらえる方法……………浅野 智彦 82

1 自由回答欄の自己語り

2 量的研究における自由記述の扱い

3 データと分析方針

4 転機を経験するのは誰か

- 5 転機を詳しく語るのは誰か
- 6 転機研究のこれまでとこれから

第5章 自己を語ること・人生を書くこと——ともに書く自分史の世界……小林多寿子

- 1 人生史サークル 黄檗こっけの会
- 2 自己語りとしての自分史
- 3 ある女性の人生の物語——なにを書いたのか
- 4 書く実践について語る
- 5 人生の物語を書く
- 6 持続する自分史の世界

第6章 たった一人のライフストーリー——自己語りの一貫性と複数性……桜井 厚

- 1 『口述の生活史』から四〇年
- 2 社会的リアリティ
- 3 ライフストーリー・インタビューの自己
- 4 語りにおける一貫性／非一貫性
- 5 自己語りのコンテキスト
- 6 「一粒の砂の中の天国」

第7章 薬物をやめ続けるための自己物語……………伊藤 秀樹

——再使用の危機に直面したダルクスタッフの語り

- 1 薬物再使用の危機とは
- 2 自己を語る取り組み
- 3 お酒をやめ続けるための二つの自己物語
- 4 二つの自己物語の背景

第8章 私利私欲を手放し、匿名の自己を生きる……………中村 英代

——12ステップ・グループと依存症からの回復

- 1 薬物使用者を取り巻く二つの世界
- 2 弱い自己が語られる場
- 3 ダルクでは何が行われているのか
- 4 12ステップ・グループの12の伝統
- 5 ベイトソンの分裂生成理論から考える
- 6 語りと共同体

第9章 人生が変わるとき……………森 一平 202

——薬物依存からの「回復」の語りとライフストーリーの理解可能性

- 1 「個人の語り」の社会学的研究に向けて
- 2 対話的構築主義と語りの理解（不）可能性
- 3 語りそのものの理解可能性——ダルクスタッフBさんによる語りの分析
- 4 方法の記述の社会学的可能性

研究コラム エスノメソドロジー（小宮 友根） 224

第10章 「ペドファイルである」という問題経験の語り……………湯川 やよい 226

——英語圏での言説のせめぎあいをめぐって

- 1 あるペドファイル（小児性愛者）男性の語りとそれに対する批判
- 2 社会問題に至らない「問題経験」の語り
- 3 ペドファイル問題の語られ方——ドミナント・ストーリーへのクレイム申し立て
- 4 非触法ペドファイルの語り——どのように聴かれ、受け止められるのか
- 5 「ペドファイルである」という自己を語る難しさ

研究コラム セクシユアル・マイノリティ研究（三部 倫子） 247

第11章 当事者研究が生み出す自己……………野口 裕二 249

- 1 はじめに
 - 2 当事者研究の展開
 - 3 当事者研究と自己
 - 4 新しい「再帰的自己」
 - 5 おわりに
- 研究コラム 当事者研究（野口 裕二） 268

編者あとがき（小林多寿子） 270

参考文献 (20)～(8)

事項索引・人名索引 (7)～(4)

組版 武 秀樹
装幀 鈴木敬子

編者まえがき

浅野 智彦

本書は「自己を語る」という営みに着目した社会学的成果を収めた論文集である。目次を見ていただければわかるように、本書に収録された論文は対象と方法において多様である。一読すればこの領域の今日における到達点がおおよそ理解できるよう目指したつもりである。そのために、自己語りに関わる代表的な研究者に執筆をお願いした。寄せられた論文は、いずれも編者の期待をはるかに上回るものであった。本書を編むきっかけとなったのは、関東社会学会の二〇一三年から一五年にかけての研究活動委員会のいくつかの企画である。企画の詳細はあとがきをご参照いただくとして、ここではそれらの一連の企画の趣旨を要約紹介することで本書の出発点を確認しておきたい（全文は関東社会学会HP）。

本テーマ部会の目的は、「自己について語る」という営みについての理論を再検討することです。

自分自身を物語るという営みについて、一九九〇年代から二〇〇〇年代初頭にかけてさまざまな理論的検討がなされてきました（ライフ・ヒストリー／ライフ・ストーリー論、自己物語論）。自分自身に

ついでに語り、語りがなされる時点からの遡及的な再構成であること、語り手と聞き手との相互行為に依存して構成されること（「ヴァージョンの展開」、語りがつねに現時点での自己再帰性（「再帰的プロジェクトとしての自己」）の一環としてなされることなどが明らかにされました。

その一方で、いくつかの難題も明らかになっています。語られる物語はヒストリーか（「今ここ」での）ストーリーか（自分「史」か「自分」史か）、物語は事実か、付与された意味か（「偽記憶」問題）、そもそも分析対象は「物語」か（物語が埋め込まれている）「関係」か、等々。

続く二〇〇〇年代は、経験的な研究を蓄積する時期といえるでしょう。さまざまな領域で、人々の自己語りが聞き取られ、検討され、分析されてきました。またその自己語りを支援し、増殖させる社会的な仕組み（「自己啓発」「自己分析」等）にも調査研究が行われてきました。では経験的研究の蓄積を踏まえて、理論を振り返って見たときどのようなことがいえるでしょうか。かつて見いだされた問題は解決（あるいは脱問題化）されたのでしょうか。現時点での知見から、かつての問題について何がいえるのでしょうか。このような問いかけは、同時に、現在も旺盛に進められている自己語りの研究の理論的な含意について振り返る機会にもなるはずで（関東社会学会ニュース 2013. 10. 18, No. 134）。

この企画からすでに五年がたった。この企画趣旨に照らしてみると非常に大きな意義があったように思われる。すなわちこの間に、対話的構築主義、生活史研究、エスノメソドロロジーなどの新しい研究成果が数多く出版されるとともに、それら方法論を異にする研究者の間で相互の批判的検討の機会が格段に増えた。関東社会学会の一連の企画がそのような流れに先鞭をつけた（と、研究活動委員の一人としては自負

しているところであるが）ことを考えると、それら近年の進展を踏まえ、当初の趣旨を發展させて展開した論文集を出版することには、大きな意義があるものと信じる。

本書を読み進めるにあたり、二つの用語についてあらかじめ補足的な説明をしておきたい。

ひとつは、「自己語り」という用語についてだ。同じように用いられる用語に「自己物語 (self-narrative)」あるいは「ナラティブ」などがある。自己について語るという営みをできるだけ広くとらえるとともに、それがある種の作動として動的な相において理解したいというのが、本書の狙いである。そのためには、完結した構造のイメージを色濃くもつ「物語」という言葉はややなじまないように思われた。本書をお読みただければわかるように、物語という言葉が通常連想させるものよりも、ある意味でゆるかったり、非言語的だったりする内容も、ここでは自己語りとして扱っている。

自己物語の原語である self-narrative にはそのような動的な含意があり、それを生かすためにあえてカタカナで表記しているのが「ナラティブ」という用語であろう。だがその言葉は、カタカナで日常語とのなじみがよくないという点はおくとしても、「自己を」語るという側面をうまく盛り込むことができない。私たちがとらえたいのは人々がその日々の生活の中で行う営みとしての自己語りである。自己語りはそのような事情から選ばれた用語である。

もうひとつは、「ライフ」という用語だ。本書を編むにあたって何度か行った研究会の席上、しばしば討論の主題となったのは「ライフ」をどのようにとらえていくのか、ということであった。自己語りとは、自己のライフについての語りであり、だからこそそれはライフストーリーやライフヒストリー、あるいは

生活史として聞き取られる。一方においてそれは人生であり、他方において生活でもある。加えて、本書で取り上げている「ライフログ」という言葉が示唆するように、さらに広い現象も指し示している。

生活・人生としてのライフ。生命としてのライフ。特に後者の意味でのライフは、たとえばフーコーの生権力論や、アガンベンのビオス／ゾーエーといった問題系にもつながる広がりをもっている。もちろんそれらのトピックが本書の直接の主題ではないのだが、研究会での議論を通してそのような広がり認識されていたことをここで確認しておきたい。本書を通読していただければ、いくつかの章の内容にその認識が反映していることを読み取ってもらえると思う。

本書は、自己語りに注目する際の焦点の違いに即して、二部構成となっている。

まず、自己を語る営み（自己語り）は、それが自分自身を経験する一つの様式であると同時に、それを他人に伝え、理解してもらったための表現でもある。そのいわば形式的な側面に注目した論考を集めたのが第一部となる。自己語りはさまざまな様式を取る。ライフログ（手帳やノートの新しい用法）はその最も新しい形式かもしれない（第1章 牧野論文）。自分自身をとくにフィクションを通して語ることが、独特の深さと強さをもつことがある（第2章 西倉論文）。自己はまた、専門職の中に埋め込まれた形でも語られる。医師たちの語りはそのようなものの一つだ（第3章 鷹田論文）。アンケートのような客観的回答にも自己を語るスペースが断片的に（あるいはときに言い訳めいた形で）設けられている。短い自由記述の中に自己語りの最も原初的な形態を見いだすことができよう（第4章 浅野論文）。仲間とともに自分史を執筆するのは一九八〇年代以降、いわば定番化した自己語りの様式である（第5章 小林論文）。そして

さまざまな自己語りの形式（自分が―自分自身を／について―語る）が、社会学者にとってある種の理論的な難題を引き起こすのは、それがたった一人の語りであるときだろう（第6章 桜井論文）。

以上のように第I部が語りの形式の多様性によって特徴づけられるとしたら、第II部にはむしろ語りの内容あるいは主題に重心をおいた論考を集めた。人生常に起きるさまざまな問題は、しばしば自己語りを引き起こすきっかけとなるものだ。たとえば薬物やアルコール依存という経験がそれだ（第7、8、9章 伊藤、中村、森論文）。依存症からの回復はしばしば、自己についての特徴的な語りと相即的に進んでいくという。そのような語りに注目した三つの論考は、その主題を共有しつつもアプローチの仕方において対照的であり、ぜひ比較しながら読んでいただきたい。また第9章は対話的構築主義への批評にもなっており、第6章と合わせて読むことで双方への理解が一層深まるものと思う。他方、同じように問題の経験でありながら、共感されることの少ない語りの一つにベドファイア（ベドフィリア、小児性愛）のそれがある（第10章 湯川論文）。いわば堂々とは語りにくい自己の語りはどのような特徴をもつであろうか。このような「自己を語る」という営み自体が、語りの主題／内容になることもありうる。当事者研究はそのようなメタ的な視点を当事者たち自身もつような営みである（第11章 野口論文）。このような当事者たちの自己観察の視点は、社会学者の視点とどのような関係にあるのか、重要な理論的問題を提起するであろう。もちろん語りをその形式と内容にきれいに分けることはできない。形式は内容を規定し、内容はしばしば形式を選ぶ。同じように自己を語るといっても、アンケート調査の自由回答欄に書くのにふさわしいと感じられることは、依存症者の集まりで語るのにふさわしいと感じられるものとはおそらく異なっているであろう。自己語りは、形式と内容が支え合いながら一つの「語り」として成立している。それでもあえ

て本書が二部構成をとるのは、分ち難く支え合っているとはいえず、異なる側面から光を当てることによって、自己語り内に在する二つの問題系が——ちょうど楕円の二つの焦点のように——浮かび上がってくるように思われたからだ。

一方において形式の側面に当てられた光は、さまざまな内容の語りを受け入れる表出の容器としての「自己語り」という問題系を照らし出すであろう。この光のもとでは、自分史を描くこととアンケートの自由記述欄に回答を記入することが比較可能な視点のもとにおかれる、そのような視野が開かれる。他方において内容の側面に当てられた光は、語られた問題経験に対して自己語りがどのような働きをもつか（たとえば「回復」に有用なのか）という問題系を照らし出すであろう。この光のもとでは、自己語りがさまざまな問題経験に対してもつ意味や機能という面から見られるような、そのような視野が開かれる。

なお、読者の関心を深めていただくために、各章末尾に推薦文献を三点示し、さらに全体を通して、重要な概念・研究対象についてより正確な、あるいはより踏み込んだ理解を促すために、四つの研究コラムをおいた（サファリング研究、エスノメソドロジー、セクシユアル・マイノリティ研究、当事者研究）。

第Ⅰ部、第Ⅱ部いずれに収められた論考も具体的な素材を記述しつつ、理論的な問題にアプローチするものとなっている。両者の比率は章によって異なるが、読者の皆さんのお好みで、興味のある章から読み出していただけだと思う。どの章から始めても、必ず他の章へと関心を誘発されるものと思う。いくつかの章を読み終えたときに、自己語りという研究領域のある程度の見取り図が読者の前に浮かび上がってくるなら、編者の目論見は果たされたことになるだろう。

第I部 自己表現の語り

第1章 「いま」を確かに残す——ライフログとアイデンティティの視覚化

牧野 智和

1 手帳に魅せられた人々

二〇一七年一月、都内某所。二〇代から五〇代までの男女十数名が集まり、三つのグループに分かれて「何か」についてあれこれ話し合っている。とどこどころで笑い声や驚きの声が上がリ、ときには身を乗り出して「何か」を熱心に注視したり、写真に撮ったりしている。この十数名のうち半分程度はすでに見知った仲だが、残りの数名はこの日初めて出会った者同士である。このように人々を打ち解けさせる「何か」とはいったい何だろうか。

このイベントはいわゆる「手帳オフ」、つまり手帳のよりよい使い方について知りたい、手帳について誰かと喋りたい、手帳を通して誰かとつながりを持ちたい、といった人々が集う「オフ会」の一種である。手帳自体にはとても長い歴史があるが、こうした手帳オフは、手帳評論家の館神龍彦さんが二〇〇七年に

開き始めて以降に活発化したといわれる①。こうしたイベントは無数にあるわけではないが、大都市圏では時折、週末を中心にこのようなオフ会が開かれている。

筆者が参加した一月のイベントはグループディスカッションが中心で、「二〇一七年の手帳、その理由」「今年挑戦しようと思っっている手帳の使い方」「手帳のおとも」というテーマが掲げられ、集まった人々が自分はずいぶんこの手帳を使っているか、どのように使っているかといったことを話し合う内容だった。外国製の珍しい手帳を使っている人がその手帳をテーブルに出すと歓声が上がリ、「これ、写真撮っていいですか?」と前のめりになる人が現れ、その手帳の「つくり」について主に褒め合うかたちで感想が語られる。「バレットジャーナル」^②と呼ばれる、その頃手帳愛好者の間で話題になっていた自作手帳が紹介されると、その工夫や精細な手仕事にやはり感嘆の声が上がる。別のイベントでは、手帳や文房具の使い方に関するワークショップが組み合わされることもあるという。

こうしたオフ会に参加する人数は日本全国でも大きな数にはならないと思われる。しかし毎年、年末から年度替わりの時期まで書店や文具店には無数の手帳が並び、多くの「手帳術本」が刊行され(牧野 2015)、近年のこうした盛り上がりは起爆剤の一つである「ほぼ日手帳」の二〇一七年度の出荷数は六七万部にも達するという(公式HPによる)。こうしたことを考えると、手帳に関心をもつ人々の裾野はこうしたオフ会を一つの頂点として、かなり広範囲にわたっているのではないだろうか。

ただ、このような動向をどう考えることができるだろうか。社会学はこれまで、「私を書く」という営みについて長らく考えてきたが、このような手帳をめぐる動向について捉える道具立てはどこまで整っているのだろうか。そこで本章ではまず、「私を書く」という営みへの社会学的アプローチを整理し、手帳

への接近法を定めることから始めたい。

2 「書かれた私」の社会学——日記研究と自分史研究を中心に

2・1 「記録」としてみる

自分自身について何ごとかを表現するという営みのうち、「語られた私」については多くの研究が積み重ねられ、またその方法論についてもいくつかの論争を含めた精緻化が試みられてきた。だが、語る場が設えられなくとも、人々は自分自身について書き綴り続けてきた。「語られた私」への注目のなかでそうした「書かれた私」はやや脇に追いやられがちだが、これまでの社会学はそれをどう扱ってきたのだろうか。

もっとも研究が多く積み重ねられてきたのは日記研究である。その日記研究について、近藤泰裕は大きく二つの方向に整理できると述べている（近藤 2002: 85）。その一つは「記録」としての日記に注目して、生活史、自己意識、コミュニケーションといった研究領域の分析資料にするというものである。もう一つは「日記そのものを分析の中心に据え、より広い観点から、それが有するさまざまな側面の検討を試みる」ものであるとし、これを「現象」としての日記と呼んでいる（近藤 2002: 22-24）。こうした記録と現象というアプローチのうち、記録として日記を扱うものが大部分であったと近藤は述べる。

記録としての日記については中野卓が、母の日記を編集した『明治四十三年京都——ある商家の若妻の日記』（1981）、自らの中学生時代の日記を編集した『中学生のみた昭和十年代』（1989）においてその位

置づけを次のように述べている。日記とは、本人やその周辺で生きた人々の生活の事実や考えや感情にわれわれが生々しく接しうる資料であり（中野 1981: 225, 226）、生活者自身が日々自らの対話を伴いながら綴ったものという意味で当人の主体性を備えつつも、個々人が生きてきた時代のなかでの個人の自己形成過程や意識・態度・行為を客観的に把握することのできるライフ・ヒストリー研究の資料になりうる、と（中野 1989: 255, 258）⁽³⁾。

こうしたスタンスが共有された研究は生活史研究に多くみられ、中野が取り組んだ商家の経営、戦争体験を初めとしたさまざまなテーマについて分析が行われてきた。生活史以外の展開としては、土井隆義（2002）が一九六〇年代後半（自らを係留する他者からの解放を求めた高野悦子）と一九九〇年代後半（自らの身体感覚に自己意識の投錨点を見いだそうとした南条あや）の日記を比較し、各時代における若者の生きづらさについて考察している。こうしたスタンスは日記のみに限られることなく、たとえば自分史についても、浅野智彦（2002）は社会的に共有される自分自身への関わり方、自己形成の方法という観点から自分史に取り組む人々の「動機の語彙」を分析し、一九九〇年代以降における自己意識や他者観の変容を指摘している。

2・2 「現象」としてみる

近藤が述べた「現象」に注目するアプローチとしては、たとえば小林多寿子の『物語られる「人生」——自分史を書くということ』（1997）がその代表例になるだろう。小林は一九八〇年代以降の「自分史ブーム」、つまり「人生の物語」が続々と産出される状況について分析している（小林 1997: 6-15）。¹⁾の際、